

「国際教育協力の国際的潮流とこれから」

第48回(2015年秋)
ACEFセミナー
講演要旨



講師：西村 幹子氏
にしむら みきこ
国際基督教大学上級准教授
ACEF 評議員

2015年秋のACEFセミナーは、10月10日(土)午後1時半より5時まで、新宿支部印刷会館ビル6階会議室にて行われました。

西村幹子氏は大学生の時に参加されたACEFスタディーツアーがきっかけで、国際協力の道へと歩まれました。パングラデシュのノンフォーマル教育にインパクトを受け、様々な教育制度と社会の関わりに関心を深めたとのこと。ICUにおいても学生に大変人気の先生のお話は、若い方々から年配の方々まで幅広い参加者に向け、大変興味深く、ワークショップなども交えて楽しい良いセミナーとなりました。参加者は28名でした。

国際教育協力の变化

国際教育協力の歴史の中で、一九九〇年は重要な年です。タイにおいて「万人のための教育世界会議」が開催され、すべての人は教育を受ける権利があるということが改めて見直されました。

紛争国に生まれた子どもや難民の教育は誰が担うのか、国際社会が責任を持つべきであると認められ、具体的な数値目標、達成期限も明確にされました。かつて幸福は経済発展で測られてきました。一九九〇年代半ば以降、格差や人間の安全保障が注目されるようになり、一人一人の能力を伸ばせる社会が大切ではないかと盛んに言われるようになりまし。国家の消費、経済発展の手段とされた教育が、国家の

投資、労働者の質を支えるものだと考えられるようになったのです。

MDGsのゴール

国連ミレニアム開発目標(MDGs)のゴールは今年、二〇一五年でした。MDGsの目標達成に向け、多くの国で初等教育は無償となり、就学率は急激に伸び、貧困率も下がりました。ところが、二〇〇八年以降、就学児童の数は増えていないのです。つまり、教育が無償であっても通うことのできない児童がいるのです。またあるNGOが学校を退学した子どもも含め、六歳から一六歳の子どもたちすべてを対象に、小学二年生の学力を測定する調査を行っています。既にケニア、ウガンダ、タンザニア等で実施され、その結果、約七割の子どもが小学二年生の学習レベルに到達していない実態が明らかになりました。

SDGsのスタート

今、世界全体の不平等に関心が集まっています。例えば食糧にしても、生産の効率ではなく配分が問題であり、先進国の消費のあり方の見直しな

り、世界全体の不平等に関心が集まっています。例えば食糧にしても、生産の効率ではなく配分が問題であり、先進国の消費のあり方の見直しな

くして改善はなされないことが認識されています。教育も同じ問題を抱えています。MDGsに代わり持続的な開発目標(SDGs)が二〇一五年九月に策定され、二〇三〇年がゴールに定

められました。SDGsでは、教育において格差をなくしてはならないと指摘されています。これはMDGsとの大きな違いです。教育は国だけでなく民間、市民社会の問題ととらえられるようになってきました。



グループに分かれてワークショップの様子、新宿支部印刷会館にて

教育を実践している現場もあります。これは基礎教育に限ったことではなく、特許や論文データベースにアクセスができないことによる弊害は、途上国の研究者にとって深刻です。

量的拡大と質的課題

SDGsにおける教育の目標は、インクルーシブで公正な質の高い教育と生涯学習機会の普及とされています。これは、初等教育が無償化されても尚、学校に来られない子どもがいることを指摘しています。MDGsの達成に向けて伸び続けてきた就学

児童の数は、二〇〇八年からほぼ変化していません。孤児であったり、障がいがあったりして未就学となつている児童は五八〇〇万人もいるのです。さらに深刻なことは教育の質です。国連は二億五〇〇〇万人の子どもが基礎学力を身につけていないと試算しています。すべての子どもたちにとって学校が有意義な学びの場となる、これがインクルーシブということです。

教育の質とは

学校教育においては学歴偏重主義が主流であり、途上国では特に情緒や感性といった教育が軽視される傾向にあります。深い文化があっても、それと学校教育とが結びついておらず、伝統を失うことにつながりかねません。高等教育や就職、階層を超えるチャンスを得るために学校に通っていると考えているので

また最近は一世紀型能力、キーコンピテンシーと呼ばれる能力が重視されています。問題をどのように解決するか、情報の分析やコミュニケーション能力が重要とされていますが、今の学

校教育はそれに応えているのか、先進国においても途上国においても大きな謎です。更に、人種、民族、家庭の環境によって就学率や学習の意欲が影響を受けていることも明らかにされています。個人の努力ではなく、所属しているグループによるのでは社会の構造がおかしいと考えられないでしょうか。本質的な問いは、教育は社会の機会を平等化できているのだろうか、グループ間の格差を広げているのではないかと問います。これを考えなくてはなりません。

講演の後参加者は、SDGsの目標を達成するには、何が促進要因となるか、また何が重荷となるかについてフォーカスファイルド分析を用いたグループワークを行いました。大きなテーマではありましたが活発な議論の結果、教育現場だけではなく、広く社会をみるということがインクルーシブな教育につながっていくという気づきを得ることができました。

まとめプログラム委員
関口弘美